

01

映像詩 PHOTO&TEXT

PHOTO ESSAY PHOTO&TEXT

映像メディア学科・教授
Department of Visual Media・Professor
西宮 正明 Masaaki NISHIMIYA

映像詩 PHOTO&TEXT

写真は言葉を必要としない世界の言語であると、目の絶対的な現実を前に、唯々直視しジワジワと湧き出して来る何がしかの感動をズバリ！と切取る行為こそが、写真のノエマであり、写真家の自己表現の基本であるとして来た。情報時代と呼ばれる中、映像は動画と静止画の区別なく映像と云う直接的言語で、NETに乗って自由に世界を駆け巡っている。一方、我々人類の文化の中心に在った文字及び言葉＜TEXT＞の役割も最も貴重な意志及びイメージの伝達メディアであることに変わりはない。文学界でのルネサンスとも考えられる。フランスの世紀末の詩人、ボードレール、ベルレーヌ、ランボー等の一世を風靡した詩の世界は、映像、特に現在のコンテンポラリーフォトグラフィーと共通した「具象を通して、抽象の世界を感覚言語で伝える」という点で、すこぶる共通した要素を持ち併せていると私は分析して来た。感性の秀れた詩の世界と、理屈ではない感覚で切取られたファインアートの写真とは、具象を撮りながら抽象に近い感覚を伝えるメディアとして私は同一視し、私の作品形式としてタイトルの“PHOTO & TEXT”を試作研究している。「目の現実から何かを感じたらば、唯々ジツ立ちつくして何がしかの感動の沸き上がるのを待つ。そして鋭く、しかもナチュラルに撮る！そして、その一瞬を切取ったフォトにわずかな文学性を加えた短文を加えて、日本の俳諧のような、江戸時代の版画のような平面作品を今楽しんでいる。

自らは、この形式をフォトと言葉による最も自分の感性に近い自己表現だと感じてるのだ。



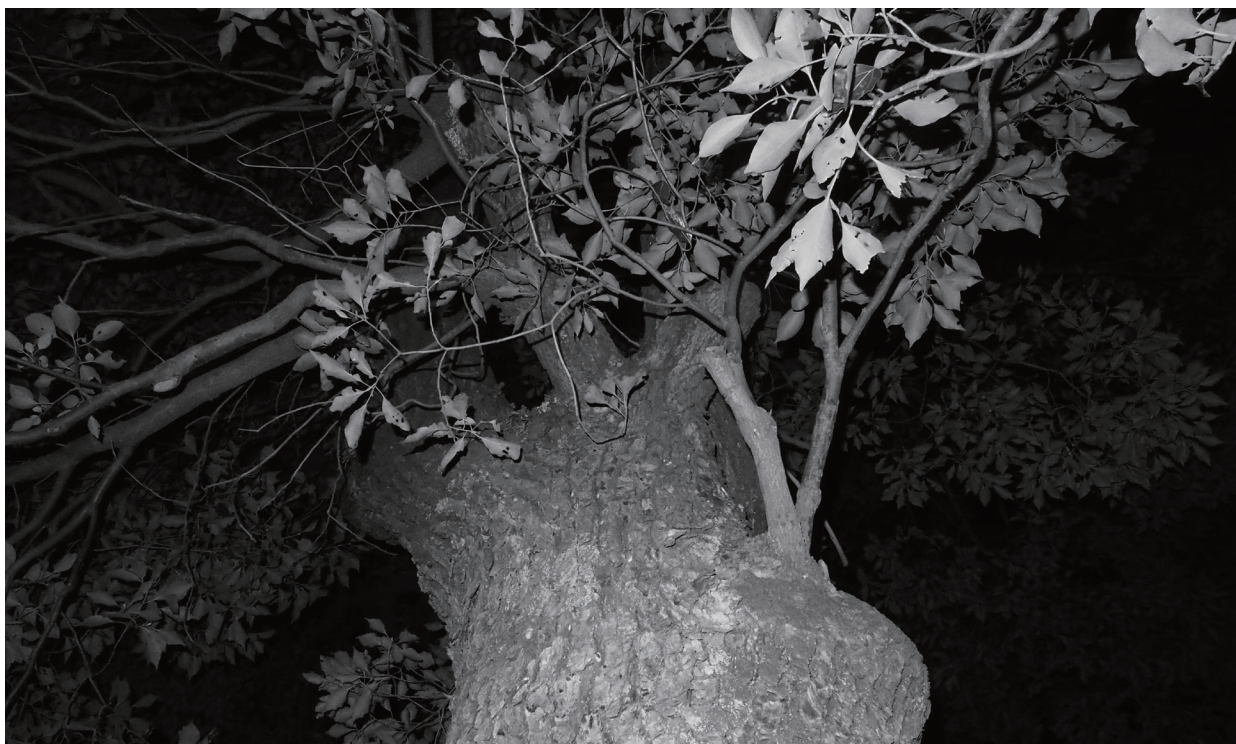
映像詩

夜の木
より

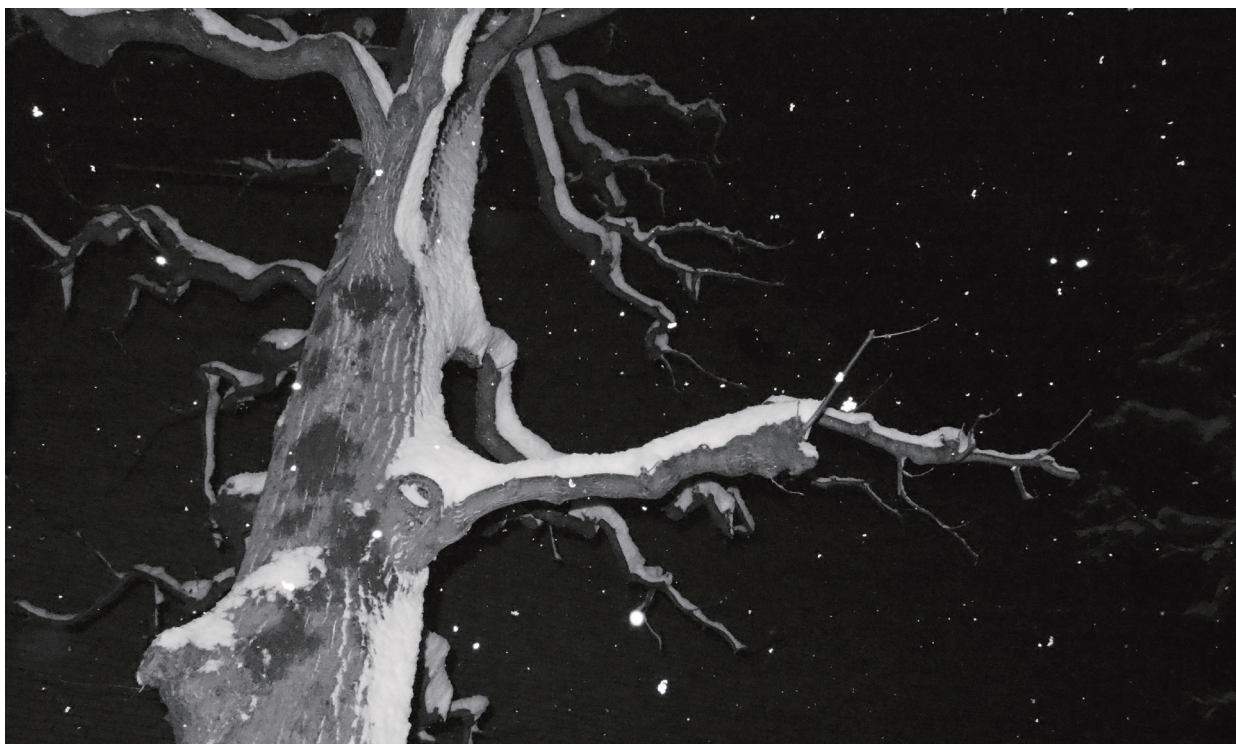




木よ、
いつからそこに



夜の木は
深夜になると
みずからのことを
しずかに
語りだすと云う
星や風に向かつて



フ
ア
イ
ン
ア
ー
ト
の

フ
オ
ト
の
メ
ッ
セ
ー
ジ
は

見
る
者
の
感
性
に
委
ね
た

抽
象
で
あ
り
た
い
の
だ
。



十二時四十七分



太陽の光は
全ての物達を
幸な宝石に
変える